

# 攻撃表出群と非表出群における攻撃的場面に対する認知過程の検討

# A Study of Cognitive Processes in Expressive Aggression and Inexpressive Aggression Groups for Attacked Scenes

小川 さとこ (Satoko Ogawa) 指導：野村 忍

【序論】攻撃とは、大淵（1993）によると「他者に危害を加えようとする意図的行動」と定義されている。さらに攻撃を起こす認知、情動、動機づけ、パーソナリティなどの内的過程は攻撃性と呼ばれる。攻撃性は様々な感情と関わるが特に怒りが攻撃的反応を引き起こすとされる（Lochman et al, 1997）。そこで近年怒りや攻撃性に対する介入研究が数多くなされておりアンガーマネジメントや認知行動療法が効果をあげている。攻撃性のプロセスに関する研究として社会的情報処理モデル（Click&Dodge,1994）があり「情報の受け取り（符号化）」「情報の解釈」「目標設定」「反応の検索」「反応決定」「実行」のステップを経て攻撃行動が実行されるとしている。しかし、攻撃性の認知、感情的側面が検討されていないことや一般的な青年期を対象とした研究がほとんど行われていないことが課題とされている。

【研究1】目的:質問紙によって大学生の攻撃性と怒りの表出の方向性について調査する。

方法：大学生・大学院生男女124名を対象に①フェイスシート②日本版Buss-Perry攻撃性質問紙（日本版BAQ）③日本語版State-Trait Anger Expression Inventory（STAXI日本語版）から構成された質問紙を用いて調査を行った。

**結果と考察:** 相関分析の結果、日本版BAQの合計得点とすべての下位尺度の得点がSTAXI日本語版「怒り表出」得点と正の相関が、日本版BAQの合計得点と下位尺度「短気」「敵意」「身体的攻撃」の得点がSTAXI日本語版「怒り制御」得点と負の相関がみられた。以上より、攻撃性は怒りの表出と関連していることが考えられる。次に日本版BAQ合計得点の高低、STAXI日本語版怒り表出尺度の各下位尺度得点の高低で  $t$  検定を行った。結果、攻撃性の高い者は低い者より「短気」「敵意」「身体的攻撃」「言語的攻撃」「怒り表出」の得点が高く「怒り制御」の得点が低かった。よって、攻撃性の高い者は攻撃的な気分を感じやすく、かつその感情を外に向けやすいことが考えられる。さらに「怒り抑制」得点の高い者は低い者より「敵意」と「怒り制御」得点が高く「言語的攻撃」が低い傾向が見られた。よって、怒り抑制が高い者は相手に対するネガティブな考えを持ちつつも、そのことを相手に訴えないことが考えられる。

【研究2】 目的:半構造化面接によるインタビュー調査を行

い、攻撃行動に関連する認知、感情の要因を検討する。さらに社会的情報処理モデルを参考にモデル図を構築する。

**方法:**対象者は、研究1において日本版BAQの得点が平均より高い、もしくは日本版BAQが平均点-1SD以内の者でSTAXI日本語版怒り表出尺度「怒り抑制」得点が平均より高かった11名（男性4名、女性7名、平均年齢21.55歳）に行った。さらにそれらをSTAXI日本語版の3つの下位尺度の得点のうち怒り抑制項目の得点が最も高かったものを怒り抑制タイプ（抑制タイプ）、怒り表出項目の得点が最も高かったものを怒り表出タイプ（表出タイプ）に分類した。

**結果と考察：**M-GTAによって導き出されたカテゴリーを段階的に構築し、プロセス図を作成。結果図をFigureに示す。表出タイプと抑制タイプの違いについて、抑制タイプは怒りや攻撃行動に対してネガティブな認知を持っていることが、表出タイプの者は怒りや攻撃行動に対してポジティブな認知を持っていることが語られた。このことから表出タイプは怒り感情や攻撃行動をポジティブにとらえているため怒りや攻撃行動の表出が維持されと考えられる。一方で抑制タイプは怒りや攻撃行動へのネガティブな考えから怒りや攻撃行動の表出が選択されにくいと考えられる。今回の調査の限界として、表出タイプの人数が少なかったことが挙げられ、表出タイプの対象者を集めてモデル図の妥当性を高めていくことが必要であると考えられる。

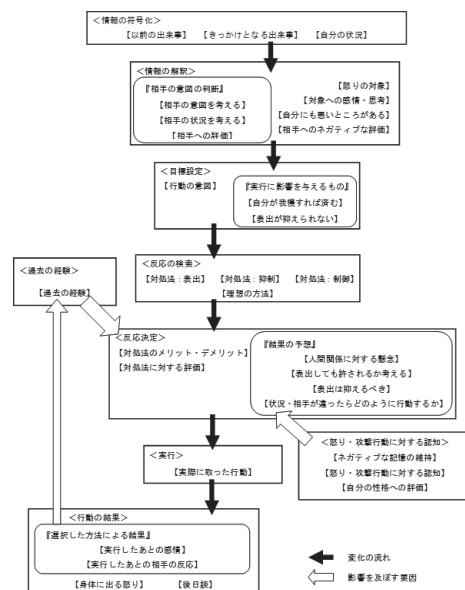


Figure 攻撃性プロセスのモデル